

美術館館長とのつれづれなる談義【2018 年秋】

先日、大阪府枚方市にある公益財団法人天門美術館の

2018 年度秋季特別展

四時清賞展

(平成 30 年 10 月 7 日から 11 月 4 日まで開催、月曜日は休館)へ行ってきました。

南画には水墨画が多いのですが、今回の展示作品の中に、カニやトンボを描いたものがありました。

カニの作者は河辺青嵐という女性。大小のカニが躍動しています。

トンボの作者は三嶋蕉窓。トンボは色づけされており、写実的です。



“本物の芸術とは何か”

今回の談義はこんなテーマになりました。

館長によれば、近頃、美術の世界では新鋭芸術が幅を利かせているそうです。

天井から吊るしたロープをつかんで、筆代わりに足で紙上の絵具をこねる。

飛んでいるヘリコプターから地上に張ったキャンバス目がけて、絵具カプセルを投げつける。

誰もやっていない新しいことをするのに、価値があるのだとか。

本当にそれが芸術といえるのでしょうか？

一方、伝統芸術はしっかりしているかという、そうでもないそうです。

例えば、美大で講師をしているお茶のお師匠さんが、権威が欲しくて教授になりたがる。一門を学生として入学させるから、と交換条件を出しながら。

それは大学教育ではないでしょう。幅広く学ぶための場であるべきです。流派を限定したら学問ではなくなります。

稽古場が、町中から大学に移って来たということではありません。

さらに、専門家だけの評価が高い作者や作品が存在する、と館長は言います。

おかしい話です。一般人がいいなあと感じてこそその芸術です。専門家だけで決めるものではありません。

前回、勝海舟の教養について書きました。

残念ながら、芸術の底が浅くなっているようです。また、芸術の幅が狭くなっていることも確かなようです。

山中信天翁の図録は、英訳作業の進捗が遅いらしく、もうしばらく時間がかかるとのことでした。